Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-09

I-JASの対話課題における中国人日本語学習者のヘッジ使用と習熟度の関係

肖, 錦蓮

(Citation)
統計数理研究所共同研究リポート,456:149-165

(Issue Date)
2022-03-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81013075

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013075

I-JAS の対話課題における

中国人日本語学習者のヘッジ使用と習熟度の関係

肖　錦蓮（神戸大学大学院生）
syokinren@yahoo.co.jp

Hedge Use of L1 Chinese Learners of Japanese in the Interview Task of I-JAS Corpus: A Study on Proficiency Effects

XIAO, Jinlian (Kobe University, Graduate Student)

概要

本研究では，「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」の対話タスク（I）を用い，中国人日本語学習者のヘッジ使用における使用量，マーカーヘッジ，習得段階を調べ，次の 3 つが確認された。その結果，（1）ヘッジ使用量については，トークンは線形的に増加するのに対し，タイプは一度増えた後むしろ減少に転じる「逆 U 字型の変化パターン」（石川，2021）を示す。（2）母語話者マーカーヘッジ（母語話者のみが使用して学習者は使用しない）4 種，学習者マーカーヘッジ（学習者のみが使用して母語話者は使用しない）3 種，上級マーカーヘッジ（初級者はあまり使わないが，中上級者になると使用頻度が上がる）14 種，が特定され，習熟度が上がるにつれて頻度が下がる初級マーカーは存在しなかった。（3）学習者のヘッジ習得は 3 つの段階をたどっていき，使用されるヘッジは中級後半と上級前半を節目として質的に大きく変化する。

キーワード

習熟度，マーカーヘッジ，ヘッジ習得，習得モデル

1. はじめに

日本語では，断定などの強い態度を示す「言い切り」表現を避ける傾向があり，その強意を緩和するヘッジ（「恐らく」「ようだ」「かも」など）が極めて重要な役割を担う。しかし，言葉も文化も違う日本語学習者にとって，個々のヘッジの意味だけではなく，その使用時に他の語との相乗により生まれるニュアンスを正しく理解して効果的に運用するといった高度な語用能力が必要となるため，場面や状況に応じてヘッジを適切に使用することは困難である。以下の例を見てみよう。

（1）A：できれば，料理長の，あの，山本さんを手伝ってほしいと思うんですけどねー。
　CCS43：あー，ほんとに無理だと思います。（J-CAT 得点：177 点，初級後半）
（2）A：チンさんには三日から四日にお願いしようと思ってたところなんですよね。

CCS04：あーそうですか，でも，やはり最近，忙しいんですから。

A：何がそんな忙しいの？

CCS04：そうですね，最近レポート書いてたんで，またまあ終わったらそのいつもの感じは大丈夫ですけど，やはり，最近はちょっと無理じゃないかなと思います。（J-CAT 得点：300点，上級前半）

（1）と（2）は「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」のロールプレイタスクから取り出した初級後半の学習者の例（1）と，上級前半の学習者の例（2）である。（1）の初級学習者（CCS43）は，アルバイト先の店長からのお願いを断ろうとする際に，初級後半の学習者がはっきりと理由を伝えずに，「ほんとうに無理だ」と結論だけ伝えている。この言い方をすると，相手は否定されたと感じてしまい，攻撃的なイメージを与えてしまう可能性が高い。一方，（2）の上級前半の学習者は，きちんと理由を伝えたうえで，「レポートを書き終わったら手伝える」という代替案を提示している。また，直接に「無理だ」と言い切るのではなく，「ちょっと」や「ではないかな」などのヘッジを付け加えることで，主張が強くなりすぎないように調整している。

例で示されたように，日本語学習者は，初級段階では，ヘッジを使用できていないが，上級段階ではうまく使用できていることが見て取れる。つまり，習熟度の向上につれ，学習者が有する語彙知識の拡充に伴い，場面に応じてヘッジを適切に使用できるようになってきているのではないか。

学習者は習熟度の上昇に伴い，使用できるヘッジの数が増加し，質も高度なものになっていくと推定されるが，最終的に学習者は母語話者と同等の量のヘッジを使用できるようになるかどうか，また，できるとするならば，それはどの段階なのかを明らかにするためには，より多くの使用例でヘッジ使用の実態を調査する必要がある。そこで，本研究では，日本語学習者の動詞使用と習熟度の関係を分析した石川（2021）の分析手法を援用し，（1）ヘッジ使用量，（2）マーカーヘッジ，（3）ヘッジの習得段階の 3 点に注目して，習熟度の上昇に伴ってヘッジの習得がどのように変化するのかを調査する。

2. 先行研究

日本語学習者のヘッジ使用を分析した研究としては，山川（2011），堀田・堀江（2012），小森（2016）などが挙げられる。

山川（2011）は，KY コーパスを用い，初級から超級までの日本語学習者（韓国語母語話者，英語母語話者 20 名ずつ）のヘッジ使用を調査した結果，日本語レベルが上がるにつれ，ヘッジの使用頻度が高くなることと，上級，超級レベルでは，複数のヘッジを組み合わせて使用していること，を明らかにした。また，ヘッジの機能に関して，学習者のレベル向上に従って，発話内容に対する「不確実性」を表す機能を持つヘッジの使用が減り，相手との関係を調整する「待遇性機能」を持つヘッジの使用が増えることから，学習者にとって，「待遇性機能」を持つヘッジの使用と比べ，「不確実性」を表すヘッジの使用は比較的に容易であると結論づけられている。

堀田・堀江（2012）は，ロールプレイデータを用いて，勧誘に対する断り行動中のヘッジに注目

し，日本語学習者（うち中国語母語話者 23 名，韓国語母語話者 10 名）と日本語母語話者（30 名）の使用を比較した。その結果，日本語母語話者と学習者間の相違点として，(1) 学習者は上級であっても，日本語母語話者よりヘッジの数も種類も少ないこと，(2) 学習者は日本語母語話者に比べ，「ちょっと」や「思う」などを多用しており，「かな」など高度な語用論的能力を要する終助詞の使用が少ないこと，の 2 点が挙げられる。それは，ヘッジに関する学習者の運用能力が十分ではないこと，教室内での指導が十分でないことに関係すると指摘している。

小森（2016）は，日本語を母語とする大学教員 16 名と日本語学習者 16 名（うち中国語母語話者 4 名）の意見文を集め，日本語母語話者と日本語学習者間ヘッジと強意詞の使用状況に違いがあるかについて考察した。その結果，ヘッジについて，(1) 使用数や使用率の上では大学教員と学習者の間に大きな違いはないこと，(2) 学習者は「強意詞＋断定表現」を多用しているのに対し，大学教員は同様の文脈でヘッジを適宜に使用すること，(3) 大学教員はヘッジを文章構造と関連付けて使用していること，の 3 点が示唆された。

日本語学習者のヘッジ使用に関する研究は，ここで挙げたもののほかにも，これまでに多くの観点から行われており，その中で様々な知見が示されてきた。ただ，先行研究には，調査対象において，いくつかの点で制約も残り，まだ十分な調査がなされたとは言い難い。制約の 1 点目は，調査対象とする学習者の人数が限られていることである。2 点目は，中国人日本語学習者のヘッジ使用を調査した研究はあるが，習熟度間の比較が行われていないことである。これらの点を改善すべく，本研究では，中国人日本語学習者による大量の産出を収集しているコーパスを使用し，習熟度に伴うヘッジの習得状況の推移から，習熟度の影響を推定することを目指して，使用量，典型的なマーカーヘッジを調べ，ヘッジ習得モデルを導き出す。

3. リサーチデザインと手法

3.1 研究目的と RQ

以上を踏まえ，本研究では，習熟度が日本語学習者のヘッジ使用に及ぼす影響を考慮しつつ，ヘッジの使用量の変化の解明，習熟度別の典型的なマーカーヘッジの特定，および，ヘッジの習得段階のモデル化の 3 点を目指す。リサーチクエスチョン（RQ）は以下 3 つである。

なお，後述するように，調査対象は，文中における具体的なヘッジとしての「機能」ではなく，先行研究でヘッジと認定された「語形」とする。

RQ1 習熟度の上昇につれて，学習者によるヘッジの使用量は増えるか。また，どの程度母語話者に近接するか。（ヘッジ使用量）

RQ2 母語話者と学習者，また異なる習熟度の学習者が典型的に使用するヘッジにはどのようなものがあるか。（マーカーヘッジ）

RQ3 学習者のヘッジ習得の発達段階はどのように整理できるか。（ヘッジの習得段階モデル）

3.2 データ

本研究では，日本語学習者コーパスの中で最大の規模を有する「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(I-JAS)を使用する。I-JAS では，1 人の学習者に対して複数のタスクを行っているが，比較対象として日本語母語話者も参加しているものには，イラストのストーリーを話すストーリーテリング(ST)，イラストについて説明する絵描写(D)，学習者と調査実施者が行う自然な対話(I)，設定された場面に応じて，与えられた役を演じて会話するロールプレイ(RP)，ストーリーテリングと同じイラストを見て作文をするタスクストーリーライティング(SW)，の 5 種類がある。

母語話者のヘッジ使用を調査した肖(2021)に基づき，双方向的なやりとりが行われる対話にはヘッジの使用が多いことから，本研究では，対話(I)タスクのデータを利用する。これは，OPI (Oral Proficiency Interview)を参考にし，学習者と調査実施者が自然な会話を 30 分程度行うものである。話題は全 15 項目で，前半は学習者本人に関する過去，現在，未来についての話であり，後半には，意見陳述や反論ができるような話題が設定されている。対話(I)タスクは，学習者と母語話者がある程度統制されている話題について産出を行っているため，内容的な均質性が高く，学習者のヘッジ使用状況を調査するという目的に適したデータである。

3.3 対象者

本研究は，中国語を母語とする学習者 200 名を分析対象とし，50 名の日本語母語話者との比較を行う。

I-JAS では，学習者の日本語能力判定に J-CAT と SPOT の 2 種類のテストを使用している。本研究では，J-CAT のスコアを日本語習熟度の目安とする。200 人の学習者の J-CAT スコアは 100 点台から 350 点台まで分かれている。本研究は石川(2021)に従い，L100(100 点台)から，L350(350 点台)まで，10 点ごとに学習者を群化して分析することとした。以下は習熟度別の人数を示した表である。

表 1

習熟度別の人数

レベル	人数	レベル	人数	レベル	人数	レベル	人数
L100	1	L170	7	L240	13	L310	4
L110	0	L180	7	L250	26	L320	3
L120	0	L190	12	L260	17	L330	3
L130	0	L200	11	L270	15	L340	1
L140	1	L210	19	L280	9	L350	1
L150	0	L220	15	L290	10	合計	200
L160	4	L230	17	L300	4		

表 1 で示されたように，L110~130，L150 に該当する学習者がいないため，分析対象から除外した。また，L100，L140，L240，L340，L350 に該当する学習者は 1 名のみであり，習熟度群というより個人を観察することになってしまうため，分析から除外することとした。これにより，L160～L330 の範囲の学習者 18 群，母語話者 1 群，合計 19 群が本研究の分析対象となる。

3.4 調査項目

本研究では，肖（2021）に基づき，83 表現をヘッジ表現とする。肖（2021）は 12 種の先行研究の中で，1 種以上でヘッジとされた 83 の語や表現を特定したが，表 2 はその 83 のヘッジを品詞別に整理したものである。

表 2

調査対象とするヘッジ語形

品詞別	種類	ヘッジ
副詞	29	少し，ちょっと，しばらく，なんとか，けっこう，たぶん，おそらく，ただ，とりあえず，やや，必ずしも，少々，なんとなく，概ね，もしかしたら，万一，あいにく，やっぱり，あまり，なかなか，せっかく，まあ，一応，大抵，大体，ほとんど，たしか，だいぶ，もちろん
助詞	10	ね，かな，とか，が，なんか，なんて，たり，けれど，だけ，くらい
名詞	10	ほう，頃，感じ，可能性，関係，感覚，方向，あたり，ほど，ふう（に），わけ
動詞類	10	と思う，気がする，恐れがある，と思われる，と考えられる，ように思われる，ように考えられる，とは限らない，～得る，場合もある
連語	8	という，のではないか，んじゃないの（か），かも，っていう，ある程度，んです，多くの，というか
接尾辞	7	～的，～げ，～っぽい，風，系，～めく，～にくい
助動詞	6	ようだ，みたいだ，らしい，だろう，でしょう，しそうだ
形容詞	1	少なくない
感動詞	1	あのう
連体詞	1	単なる
総計	83	

なお，これらのヘッジ語形は，文脈によってヘッジとして機能している場合とそうでない場合があり得るが，使用の状況を計量的な増減で全体的に把握することを優先する。そのため，ヘッジの語形ごとの使用数に限定し，実質的な機能の点は議論しない。また，学習者発話には言い直しや誤用が含まれると想定されるが，ここで注目したいのは，学習者がヘッジの語形を実際に産出できるかどうかという点であり，それが適切に使用されているかどうかについては，本稿では議論の対象

外とする。

3.5 分析の手順

RQ1（ヘッジ使用量）については次の手順で調査する。まず，群ごとに使用されたヘッジのトークン数（延べ語数）とタイプ数（異なり語数）を調べる。各群の人数が異なるため，トークン数については 1 人あたりの調整頻度に換算する。一方，タイプ数については，人数が多くなると使用するタイプ数も増加するわけではないので，そのまま分析対象とする。次に，1 人あたりのトークン数と，タイプ数について，学習者 18 群の平均値，と母語話者の値を比較する。最後に，母語話者のヘッジ使用量を 100 として，学習者 18 群のヘッジ使用量を比率に変換し，L160～L330 間の変化をグラフとして示す。グラフのデータに多項回帰式を当てはめ，ヘッジ使用量と習熟度の関係を数量的に確認する。

RQ2（マーカーヘッジ）については次の手順で調査する。まず，全 83 種のヘッジを対象に，学習者 18 群の全体と母語話者を比較し，母語話者のみが使用する母語話者マーカーヘッジと，学習者のみが使用する学習者マーカーヘッジを特定する。次に，母語話者および学習者を含む 19 群中のレンジが 13 以上になる基本ヘッジ 36 種（表 3）を対象に，学習者群ごとに，個々のヘッジの使用頻度と J-CAT スコア（10 点刻みの値）の相関値を求める。その後，相関（｜r｜＞＝0.7）の語を抽出し，習熟度と負相関する（習熟度が上がると使用頻度が減少する）初級マーカーヘッジ，習熟度と正相関する（習熟度が上がると使用頻度も増加する）上級マーカーヘッジを特定する。

表 3
分析に使用した基本ヘッジ（レンジが 13 以上）

分析対象とするヘッジ語形
が／という／ようだ／～的／ね／だけ／でしょう／けれど／ほう／と思う／とか／くらい／しそうだ／少し／頃／ちょっと／かな／みたいだ／感じ／なんか／可能性／多分／ただ／やはり／あまり／なかなか／あのう／かも／まあ／ほど／大体／ほとんど／ふう／たり／んです／もちろん（36 種）

RQ3（ヘッジの習得段階モデル）については，前述の基本ヘッジ語形 36 種について，ヘッジ語形を第 1 アイテム，参加者群を第 2 アイテムとするクロス表を作成し，対応分析を実施する。第 1 アイテムは 36 カテゴリー，第 2 アイテムは 19 カテゴリーからなる。今回のデータで得られた散布図を手掛かりに，異なる習熟度の学習者（L160～L330）と母語話者がどのように分類されるか，また，それぞれを特徴付けるヘッジ語形にはどのようなものがあるかを検討する。

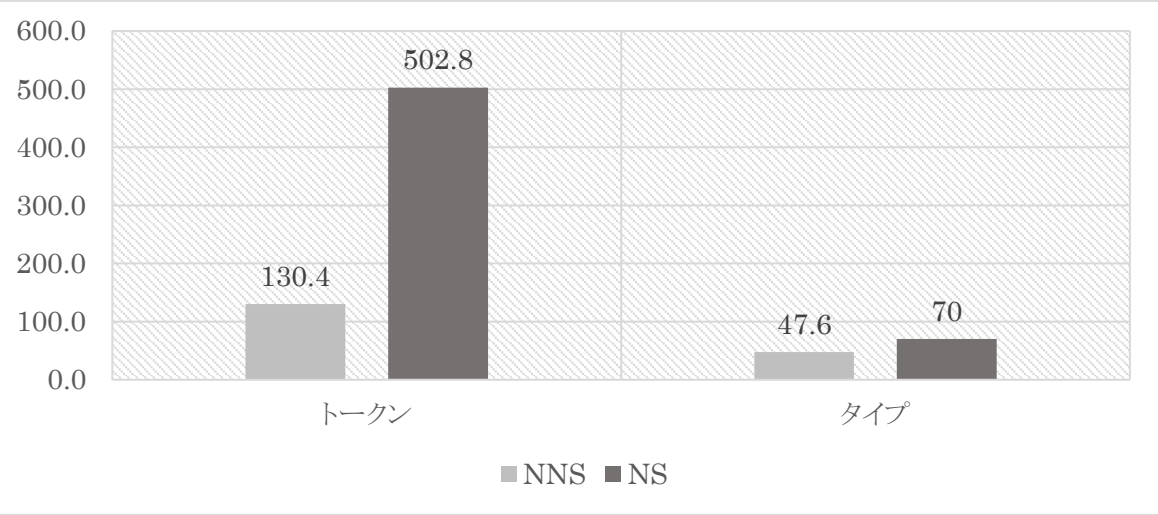
4. 結果と考察

4.1 RQ1 ヘッジ使用量

1 人あたりのトークン数と，タイプ数について，学習者 18 群の平均値と母語話者の値を比較した

ところ，図 1 の結果が得られた。

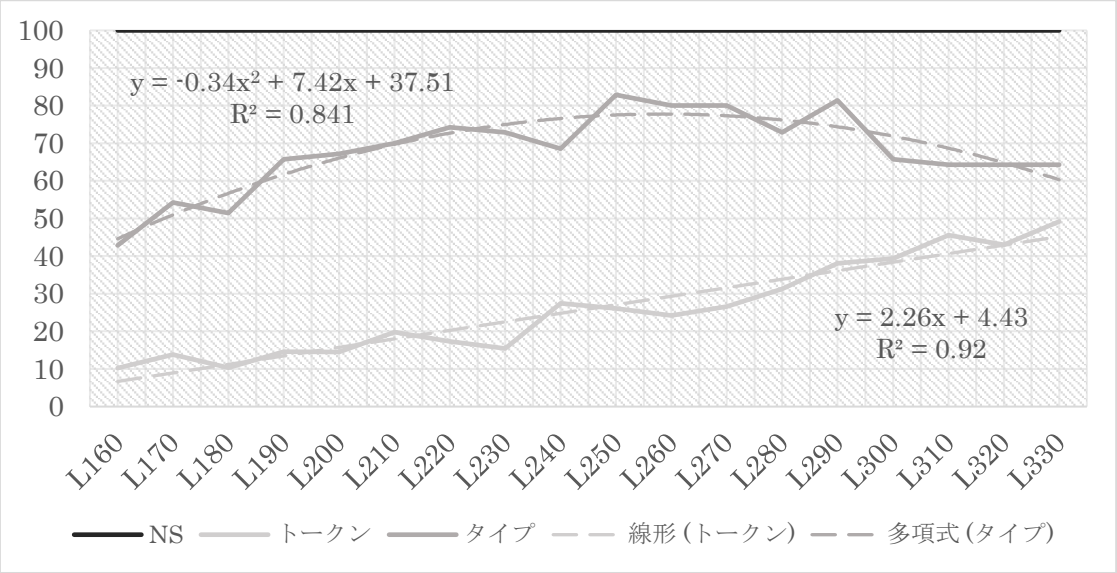
図 1
学習者と母語話者のヘッジ使用量



中国語を母語とする日本語学習者が使用したヘッジのトークン数は母語話者の 1/4 程度にとどまり，タイプ数は母語話者と比べ 32%（約 23 種）少ないことがわかった。ヘッジの使用量という点で，学習者と母語話者の間には大きな隔たりが存在することが確認された。

次に，母語話者のヘッジ使用量（調整トークン数・タイプ数）を 100 として，学習者 18 群のヘッジ使用量を比率値に変換し，L160～L330 間の変化をグラフとして示したところ，図 2 の結果を得た。

図 2
習熟度別のヘッジ使用量の変化



調整トークン数については，日本語レベルが上がるにつれ，産出するヘッジの量が徐々に増加していくパターンが見られた。そこで，線形回帰を行ったところ，R^2=92%という高い説明力が得られ，線形的な増加傾向が確認された。ただし，L330 であっても，母語話者と比べると 50%程度にとどまっている。この背景としては，中国の学習者は，日本語母語話者との接触機会が限られており，場面や状況に応じてヘッジを適切に使用する意識が十分に育っていないためではないかと考えられる。

また，タイプ数については，トークンの場合ほど線形的な上昇が見られなかった。L250 あたりまで上昇するが，それ以降はむしろ減少し，L330 では母語話者の 64%程度にとどまっている。トークン数の場合と同じように線形回帰を行ったところ，回帰式は y = 0.92x + 59.17 となったが，説明力は 21%にとどまった。そこで，よりよくフィットするモデルを探すべく，多項近似を試みたところ，R^2＝84%という高い説明力が得られた。タイプ数については，L160 から L 250 まで比率値が緩やかに上昇し，それ以降，減少する傾向にあると言えそうである。

トークンは線形的に増加するのに対し，タイプは一度増えた後むしろ減少している。これは，I-JAS を用いて日本語学習者の習熟度別の動詞使用頻度の変化を概観した石川（2021）で観察された結果とほぼ同じものである。石川は，とくに上昇後下降に転じるタイプの変化について，これを「逆 U 字型の変化パターン」であるとし，以下のように述べている。

> 動詞使用量に関するこうした逆 U 字型の変化は，第 2 言語習得で広く見られる U 字型発達曲線（U-shaped behavioral development）の裏返しとしてとらえることができるだろう。…初級者はそもそも知っている動詞が少ないため，また，発話量そのものが少ないため，動詞の使用量は少ない。…中級者は，覚えたての多種・多量の動詞を試行的に使用するため，動詞の使用量は場合によって母語話者を上回る。…上級者になると，文脈に応じた適切な動詞を適量使用するようになり，結果的に，動詞の使用量はむしろ低下していくものと考えられる（石川，2021）。

このように石川は，学習者による動詞の使用量が 3 つの段階からなるプロセスをたどると考えている。

石川の動詞の分析では，タイプ数についても，トークン数についても逆 U 字型の変化が見られたのに対し，今回のヘッジの調査では，タイプ数については逆 U 字型の変化が見られたが，トークン数について見られないという石川（2021）と矛盾する結果が得られた。これはなぜだろうか。考えられる解釈の 1 つとして，総じて数が少ないタイプ数については，全体の数が圧縮されているため，増えて，やがて減っていくというプロセスが早く完了するということが考えられる。一方，トークンは数が膨大であるため，逆 U 字型のカーブが横に引きのばされる形になり，我々が見ている L330 までのものだと，その右半分が，まだ見えないため，L330 までの結果が逆 U の字の前半部分だけのものとなり，逆 U 字カーブの右半分までが見えなかったということである。そう考えると，タイプ数とトークン数は異なる傾向を示したということではなく，L330 に達しても，ヘッジ表現の語用能力の向上が十分ではなく，さらに長い学習期間ないし日本語使用年数が要求されるということを示していると

言えるのではないか。つまり，動詞では逆 U 字の完了が早いが，ヘッジでは，母語話者相当に習得するのに長い学習期間が必要であることを示すということになり，ヘッジ表現が学習者にとって習得困難であることがあらためて確認されたということになる。

しかしながら，ここで得られた結果が，石川（2021）が動詞について調べた結果とほぼ同等であったことを踏まえると，逆 U 字型の変化パターンはヘッジに特化したものではなく，日本語語彙獲得の一般的なパターンを表しているという可能性もある。

4.2 RQ2 マーカーヘッジ

まず，83 種のヘッジの各々について，学習者 18 群による使用頻度と母語話者による使用頻度を比較することで，(a)母語話者マーカーヘッジ（母語話者のみが使用して学習者は使用しない）4 種，(b)学習者マーカーヘッジ（学習者のみが使用して母語話者は使用しない）3 種が特定された。

その後，母語話者を含む全 19 群中のレンジが 13 以上になる基本ヘッジ 36 種を対象に，習熟度スコアとヘッジ頻度の相関を調べ，強い相関（$|r|>0.7$）を示すヘッジを抽出した。これにより，(c)習熟度と正相関となる上級マーカーヘッジ（初級者はあまり使わないが，中上級者になると使用頻度が上がる）14 種がそれぞれ特定された。一方，初級マーカーに該当するヘッジは見られなかった。表 4 は，これらを一覧にしたものである。

表 4
タイプ別マーカーヘッジ

マーカー種別	該当ヘッジ
母語話者マーカー	恐らく，（の／ん／φ）ではないか，しばらく，～げ（4 種）
学習者マーカー	必ずしも／少々／少なくない（3 種）
初級者マーカー	該当なし
上級者マーカー	が／けれど／とか／くらい／ちょっと／かな／感じ／なんか／やはり／あまり／あの（う）／ほとんど／たり／んです（14 種）

以下，母語話者マーカーと，学習者系のマーカーに分けて文脈を概観していく。

4.2.1 母語話者マーカー

196 名の学習者が一度も使用していない母語話者マーカーは 4 種ある。これらは，性質上，2 つのタイプに分類できる。1 つ目のタイプは，語としての難度が高いグループで，「～げ」と「（の／ん／φ）ではないか」が該当する。以下はその用例である。

（3）出汁が入ってるとか，具材もいろいろお洒落げな物が入ったり。（JJJ18）
（4）人間側としてはその寄生虫ってのは，まあ，まあ，いわまあ害虫みたいなもので，まあ殺して

しまえばいいんじゃないかという話，になるんですけど，その，寄生虫側の意見としては，人間が，地球上にとっては一番のその害悪な存在ではないか，みたいな，(JJJ03)

「気(げ)」は，接尾辞として，「体言・形容詞の語幹・動詞の連用形などに付いて，形容動詞の語幹または名詞をつく」り，「様子・気配・感じなどの意を表す」というニュアンスを伝える(『スーパー大辞林 3.0』)。「(の／ん／φ)ではないか」は，「体言・形容動詞の語幹＋(φ／なの／なん)ではないか，形容詞・動詞＋(の／ん)ではないか」の形で用い，話し手が自らの推測や見解を表す(『日本語文型辞典』)。

これらの 2 語を中国人学習者が使用しない背景に，(a)活用上の難度と，(b)意味上の難度という 2 つの理由が考えられる。まず，(a)に関して，これら 2 語は，前接する語に応じて語形を変化させる必要がある。加えて，「～げ」は，動詞や形容詞に後接する場合，元の品詞が変わることもある。「～げ」が動詞や形容詞に後接する場合，元の品詞が変わるが，それが，活用の上での難度を高めている。また，「げ」が，意味の段階性を持たない語にも後接することで，使用時の意味が推測しにくい。

次に，(b)に関して，「げ」は，通常，意味の段階性を持たない語にも後接するという難しさがある。たとえば，(1)の場合，「お洒落」であることは，ふつう段階性を意識させないが，ここでは「げ」がつくことで段階が弱められている。また，名詞に後接する「ではないか」は，そこで文が終始すると固い断言を含意するが，その後に「と思う」などが続く場合，主張をやわらげるヘッジ機能が生じる。例(2)の場合も，「害悪な存在ではないか」という表現は断言のように聞こえるが，「みたいな」が付け加えられるため，全体としてはヘッジ的な機能が生じている。

以上で見たように，活用上の特殊性があり，加えて，意味上の曖昧性があるため，これらの 2 語は上級学習者であっても使用できなかったのではないかと思われる。

さて，学習者が使用できなかったヘッジのもう 1 つのタイプは，語としてのフォーマリティがとくに高いタイプで，「恐らく」と「しばらく」がこれに該当する。コーパスにおける「恐らく／たぶん」の使用傾向を分析した前坊(2012)で指摘されたように，「多分」は私的な場で，日常的な話題についての主観的な推量に多く使用されるのに対し，「恐らく」は他者への改まりが必要な場で，考えを客観的述べる際に用いられる。また，「しばらく」は古典日本語「しまらく」から由来された語であり，「平安時代，主として漢文訓読に用いられた語」である(『スーパー大辞林 3.0』)。「恐らく」と「しばらく」は，書き言葉的であり，フォーマリティの高い表現であるという点で共通している。くだけたインタビューでこうしたフォーマリティの高いヘッジが出てくるのは，一見，不自然に思えるが，母語話者のこれらの語の選択には談話的な必然性がある。以下は母語話者による「恐らく」の用例である。

(5)C:あの，素人的にはですね，舞台は濡れてもいいのかってゆう，大丈夫なんですか
K:あのー，ま，恐らく特殊な加工がされてるんじゃないかなって思うんですけど，やっぱりこう一幕の最後にそのシーンがあって，で最後その幕間，に休憩時間にみんながモップ掛けをしてました，ただ，水をこう何てゆうんでしょう，ワイパーのような物で，グーってやって，落として

いたので，たぶん何か穴とゆうかーこうなんか排水溝みたいな物が，途中，開くんじゃないかなって，なんか見ながら思ってました。(JJJ19)

(5)において，話者は相手の「素人的にはですね」という言葉を受け，自分をプロの立場に置かざるを得なくなる。そのため，それまではくだけた会話をしていたにもかかわらず，専門家として答えることを要求される。この場合に選ばれた「恐らく」という表現は，話者の生の声というより，その場で，相手との関係上，担わざるを得なくなった専門家という役割を演出するためのものではないかと考えられる。「恐らく」を使用することで，聞き手に改まったイメージを与え，後述する内容の客観性が増すという効果が生み出されている。このように，母語話者は何らかの意図により，類似した表現の中から文脈に応じたヘッジを選出することがしばしば行われる。これらのニュアンスは相対的に微妙なもので，学習者には習得が難しく，そのため，上級を含めた学習者に使用されていないのではないかという可能性が示される。

以上をまとめると，母語話者のみが使用するヘッジは，(1)語としての難度(活用・意味)が高いヘッジと，(2)フォーマリティの高いヘッジ，の 2 種である。これらのヘッジの使用は，上級になっても困難な課題である。

4.2.2 学習者系マーカーの使用

学習者系マーカーには，学習者マーカー・上級者マーカーの 2 つがあるが，ここではまず，50 名の母語話者が一度も使用していない学習者マーカー3 種を概観する。

4.2.2.1 学習者マーカーの使用

学習者のみが使用するヘッジは「必ずしも／少々／少なくない」の 3 種である。これらの 3 語は内容上，2 つのタイプに区分される。

1 つ目のタイプは，談話の要求する程度よりもフォーマリティが高すぎるヘッジである。「必ずしも」と「少々」が該当する。学習者による「必ずしも」の例は以下の 1 例である。

(6) インターネットで仕事ができますので，必ずしも都市にいらない（住む必要がない)。(CCM28，L190)

「必ずしも」はやや古語めいた表現である。日常的な会話をする際に「必ずしも」を使用すると，聞き手にかたいイメージを与え，くだけた会話で個人的な話をしているのに，途中であたかも新聞の社説のような感じになってしまう。このように，文脈と使用される言葉のフォーマリティのずれは聞き手に違和感を抱かせやすいと考えられる。母語話者は類似した文脈で，フォーマルな「必ずしも」のかわりに，「って限らない」を使用する（例：「お金があっても幸せって限らない（JJJ05)」)。

次に，「少々」については，「少々」は「少し」の丁寧で改まった表現であり，『「少々の塩

を入れる／少々お待ちください／少々のことなら我慢する」のように，料理のレシピで使われる表現や，相手に丁寧に依頼する時に使う表現など，いずれも使用される場面が特殊なものに固定されている。学習者は，使用場面に関する知識が乏しいため，単に，「数量・程度がわずかである」という意味で，全体としてくだけた文脈の中で「少々」を使ってしまっている。以下は学習者による「少々」の例である。

（7）ディンタイフォン（店名）ってゆうのが有名，日本も支店があると思ったんですけど，少々高いです。（CCS54，L240）
（8）（ちょ，ちょ）少々お待ちくださいね。あのー，その前には，『昼顔』という不倫をテーマ（とする）ドラマを見た。（CCH55，L280）

（7）において，学習者は小龍包の値段というごく日常的な話題について話をしている。ここで改まった「少々」を使うと，評論家のような発言に聞こえやすく，文脈から浮いている感じがする。

（8）については，相手に質問された時に，考える時間を稼ぐために，学習者は「少々お待ちください」というビジネスシーンでよく使用される慣用句を使用している。文法的には間違っていないが，雑談では若干違和感が生じる。母語話者は似たような文脈では，通例「ちょっと待ってください（JJJ26）」を使用している。

学習者は，話のはじめに，くだけた表現の「ちょっと」を言いかけているものの，それを「少々お待ちください」という固い表現で言い換えている。これは学習者が慣用句をかたまりとして覚えて，場面の違いを考慮せずにそのまま使用しているためと考えられる。このように，中級後半の学習者であっても，個々の文脈でどのヘッジを使うかを即座に判断して，適切なものを選択することは決して容易ではないと思われる。

2 つ目のタイプは，量や数をぼかすヘッジ（「少なくない」）である。あえてもったいぶって否定形で表現するため，日本語では，しばしば，「むしろ多い」という含意を持つ（英語の not a few などにも似た用法がある）。例（9）を見てみよう。

（9）C：どこにあるの，そのチュウメイ（店名）っての，この大学のそば？
K：台中は，チュウメイの店は，少なくないです。店は 3 軒かな…（CCT19，L250）

上記では，「少なくない」というもったいぶった言い方をすることで，聞き手は，店の数が相当多いと予想する。しかし，実際には 3 軒だけなので，聞き手には違和感が生じたはずである。ここには，前述のフォーマリティのずれという問題も関係している。

なお，ある程度数が多いことを伝えたい場合，母語話者は「少なくない」ではなく，以下のように言うのがふつうである。

（10）「八王子は特に，あのたまにスーパーに行くと，八王子産の野菜とか結構あるので，特にこれが有名っていうのはないですね。（JJJ01）

このように言うほうが，聞き手に違和感を与えることなく，文の意味もやわらかくなると言えよう。

以上をまとめると，学習者のみが使用するヘッジは，（1）当該文脈の位相よりもフォーマリティが高すぎるヘッジ，（2）意味のずれがあるヘッジ，の 2 種である。学習者にとって，文体や場面にあったヘッジの選択は誤りやすくところであり，文体のフォーマリティをうまく理解し，ヘッジを使いこなせていないのが現状である。

4.2.2.2 上級者マーカーの使用

すでに述べたように，習熟度があがるにつれて頻度が下がる初級者マーカーというものは存在しなかった。これはヘッジが総じて難度が高く，初級者ではほとんど使用できないためである。一方，習熟度と頻度が正相関を示し，初級者はほとんど使わないが，中上級者になると広く使うようになる上級者マーカーは 14 種であった。これらは用法と意味により，大きく 4 つのタイプに区分できる。

1 つ目のタイプは文（文節）の後部に使用されるヘッジ（が／けれど／んです／かな／たり／感じ）である。日本語では，文の意味を決定づけるのが文の最後部であり，話し手の表現意図が文の後方に現れやすいと言われている。上級者になると，文の意味を全体的に調整し，文の終わりに適切なヘッジを使用できるようになる。

（11）伝説があります。日本語では言いにくいですけど，その湖に半分の橋があります。（CCH11，L260）

（12）ずっと田舎で，住むなら，ちょっと，私の性格では，耐えられないかなってゆう感じ…（CCM35，L320）

2 つ目のタイプは与える情報がおおよその数値であることを表す「くらい」や，分量や度合いの範囲を限定したり定めたりする「ちょっと／あまり／ほとんど」である。これらのヘッジを使用し，情報の確かさを曖昧にすることで，「万が一情報が不確かでなくても，その責任を問われることがないように自己防衛の働き」（入戸野，2004）が果たされている。上級者になると，できるだけ正確にものを伝えることを意識しながら，これらのヘッジを使いこなせるようになっている。

3 つ目のタイプは例を示し，他に同類のものがあることをほのめかす「なんか／とか」である。「なんか／とか」を使用することで，多くの事柄の中から，代表性のあるものを取り上げて，「例えば」の気持ちが込められている。あくまでも例示するだけで，断定を避けた表現として，相手に判断または理解を委ねる効果がある。

（13）今は伝統的な祭りなんかはないかな。（CCH12，L280）
（14）友たちと一緒に何か面白いこと，楽しいことをするとか。（CCH 07，L280）

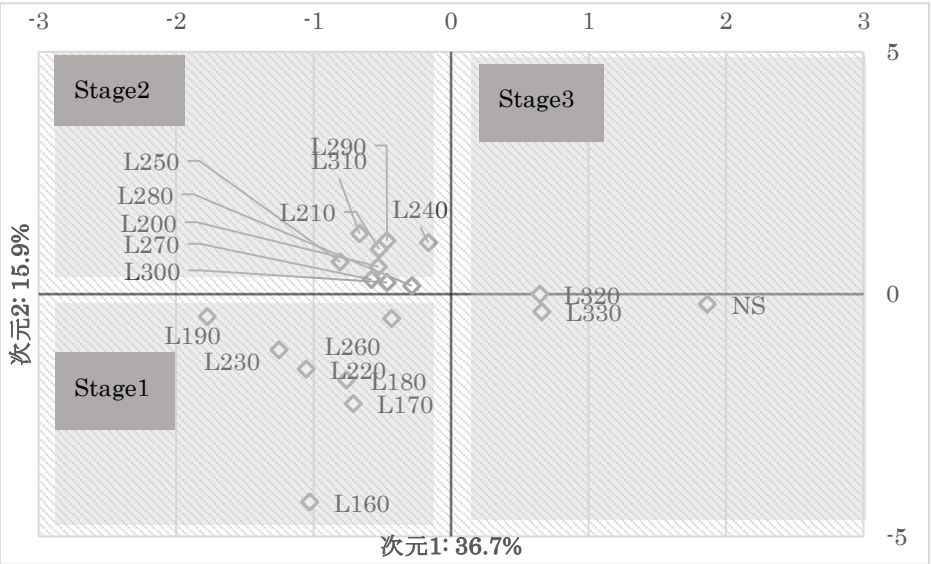
4 つ目のタイプは，フィラーとして使用する「あのう」である。フィラーがなくても文の意味は通じるが，「あのう」は次の言葉を発する際のつなぎとして，「話し手の発言権がまだ続いていることの合図」として使用されるものではあるが，同時に「聞き手に意見を述べさせる時間を与え，聞き手を会話に引き込む」機能を果たすものでもある。（入戸野，2004）。日本語の習熟度が上がるにつれ，談話をスムーズに進行させる意識が高まり，こういうフィラーを入れながら会話を進められるようになる。

以上をまとめると，初級者はほとんど使わないが，中上級者になると広く使うようになる上級者マーカーとなるヘッジは，（1）文（文節）の後部で使用され，（2）おおよその数値を含意したり，分量や度合いの範囲を示したり，（3）他に同類のものがあることをほのめかしたり，（4）フィラーとして使用されるものと言える。

4.3 RQ3 ヘッジ習得段階モデル

RQ1 および RQ2 の調査で，学習者と母語話者間，また異なる習熟度の学習者間で，ヘッジの使用量にしても，使用されるヘッジの種類にしても，差異があることが確認された。RQ3 では，ヘッジ語形を第 1 アイテム，参加者群を第 2 アイテムとして対応分析を実施することで，異なる習熟度の学習者と母語話者がどのように分類されるか，また，それぞれ典型的に使用するヘッジ語形にはどのようなものがあるかを検討する。以下は，対応分析の結果である（図 3）。

図 3
対応分析の結果



対応分析の結果，第 1 軸（横軸）の寄与率は 36.7%，第 2 軸（縦軸）の寄与率は 15.9%であり，2 つの軸で全体の分散の半分以上を説明できることが確認された。散布図は第 1 軸で左右に分割され，次いで，第 2 軸で上下に分割されることになる。散布図では，性質の近いデータが近くに布置されるので，18 の学習者群がいくつかのかたまりに区分されるかを見ることで，学習者のヘッジ習得段階モデルを解明することができるのであろう。

ここで，学習者の布置状況に注目しながら，2 つの軸の意味を考えてみたい。まず，第 1 軸に注目する。左領域には，L160～L310 の学習者が，右領域には L320，L330 の学習者と母語話者が布置されている。よって，第 1 軸は，初級後半から上級前半までの学習者を左方に，それ以外の上級学習者と母語話者を右方に分割する軸となっているといえよう。

次に，第 2 軸に注目する。第 1 象限に布置された学習者がないため，右側では上下の差がはっきりしないものの，左側を見ると，上部領域には L200～L210，L240～L250，L270～L310 の学習者が，下部領域には L160～L190，L220～L230，L260 の学習者が入っている。重なっている部分もあるが，第 2 軸は中級前半から上級前半までの学習者を上部に，初級後半と一部の中級前半の学習者を下部に分割する軸となっているといえよう。

以上を合わせて考えると，第 1 軸は，上級学習者，母語話者とそれ以外を，第 2 軸は，初級後半学習者とそれ以外を分割する軸となっている。学習者のヘッジ習得過程において，L260 と L320 が節目となる時期である可能性が示唆される。学習者のヘッジ習得段階は，第 1 軸の左下ゾーン（Stage 1），その左上ゾーン（Stage 2），右側ゾーン（Stage 3）の 3 つに区分でき，ヘッジ習得はステージ 1～ステージ 3 の順に進んでいくものと考えられる。図 4 は各段階と関係の深いヘッジを合わせて示している。

図 4

中国人日本語学習者の習熟度別ヘッジ習得モデル

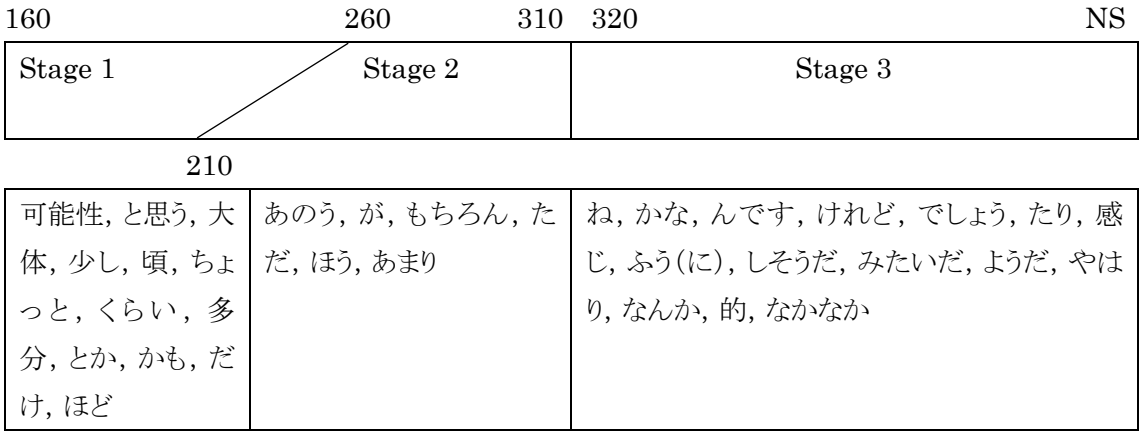


図 4 に示されるように，ステージ 1 からステージ 2 への進行は学習者によって差が存在している。早い学習者の場合，中級前半（L210）になるとヘッジの能力がステージ 2 に進み，遅い学習者の場合，中級後半（L260）になってからステージ 2 に入る。中級後半になったら，ほぼ全ての学習者

がステージ2に進むことが確認された。また，L320になると，ほぼ全員がステージ3に移っていく。

次に，各々の段階で学習者群がそれぞれ典型的に使用するヘッジ語形を合わせてみると，第 1 段階の学習者は，分量や時期，度合いを推測したりぼかしたりする「ちょっと／くらい／少し／大体／だけ／頃」や，物事の真実性を推測する「かも／多分／と思う／可能性」などのヘッジの使用が特徴的である。これらのほとんどは「命題の不確かさ」（堀田・堀江，2012）を示す機能を果たしている。

中級になる学習者は次第に第 2 段階に入り，聞き手を会話に引きこむための「あのう」や，「異論を受け入れる姿勢」（東泉・高橋，2020）を示す「もちろん」，後を言いさしにして，物事を婉曲に述べる気持を表わす前置き表現「が」が使用できるようになった。この 3 語はいずれも談話の展開の中でヘッジ機能を果たしているため，より高度な語用能力が求められるヘッジであると言えよう。

そして，第 3 段階に入ると，ヘッジの習得は量的にも，質的にもより一層高度なものになっていく。文（文節）の後部に使用される「ね／かな／けれど／んです／でしょう／たり／感じ）や，様態を描写したり，推量を表したりする「ふう（に）／ようだ／みたいだ／しそうだ」などが使えるようになってくる。この段階において，類似した意味や用法を持つヘッジの使用は集中することが特徴的であり，それはヘッジ学習が単独の項目学習から体系学習に移り，類似した意味や用法を持つヘッジの使い分けを意識しながら使用できるようになるためと考えられる。

5. まとめ

以上，本研究では，I-JAS の対話タスク（I）を用いて，（1）ヘッジ使用量，（2）マーカーヘッジ，（3）ヘッジの習得段階の 3 点に注目し，習熟度がヘッジの習得状況にどのような影響を及ぼしているかを調査した。以下，リサーチクェスチョン順に結論をまとめる。

まず，RQ1「ヘッジ使用量」については，トークンは線形的に増加するのに対し，タイプは一度増えた後むしろ減少に転じる「逆 U 字型の変化パターン」（石川，2021）を示すことが確認された。タイプ数と比べ，トークンは数が圧倒的に多いため，逆 U 字の習得のプロセスが未だ完成しておらず，上昇パターンのみが示された可能性が確認された。

次に，RQ2「マーカーヘッジ」については，母語話者マーカーヘッジ（母語話者のみが使用して学習者は使用しない）4 種，学習者マーカーヘッジ（学習者のみが使用して母語話者は使用しない）3 種，上級マーカーヘッジ初級者はあまり使わないが，中上級者になると使用頻度が上がる）14 種，が特定された。ヘッジが総じて難度が高く，初級者ではほとんど使用できないため，習熟度があがるにつれて頻度が下がる初級マーカーというものは存在しなかった。母語話者マーカーには，（1）語としての難度（活用・意味）が高いヘッジと，（2）フォーマリティの高いヘッジ，の 2 種が入り，学習者マーカーには，（1）フォーマリティが高すぎるヘッジ，（2）意味のずれがあるヘッジ，の 2 種が含まれる。また，学習者の習熟度が上がるにつれ，使用できるヘッジの量だけでなく，質も高度なものへと変化していくことが確認された。

最後に，RQ3「ヘッジの習得段階」については，ヘッジ習得は 3 つの段階をたどっていくというプロセスが明らかにされた。第 1 段階（中級後半まで）の学習者は主として「命題の不確かさ」を示す

機能のヘッジを使用し，第 2 段階（上級まで）になると，談話の展開の中でヘッジ機能を実現するヘッジが使用できるようになる。上級になると，ほぼ全員が第 3 段階に移り，類似した意味や用法を持つヘッジを使い分けながら使用できるようになる。

もっとも，本研究には制約も残されている。1 点目は調査項目とするヘッジ語形が限られることである。ヘッジには幅広い言語項目が含まれており，従来の研究で取り上げられていないが，実際にヘッジとして使用される語も存在するため，今後は調査対象の範囲を広げ，中国人日本語学習者によるヘッジ使用についてさらに詳しく調査する必要があると思われる。

2 点目はヘッジの機能について考慮していないことである。本研究ではヘッジ語形の全体使用状況に注目して調査を行ったが，実質的な機能について議論していない。すでに述べたように，ヘッジ語形は文脈によって意味緩和機能を持ったり持たなかったりすることがありうる。そのため，学習者が該当文脈でヘッジ語形の意味緩和機能を正確に使用できるかどうかを厳密に調査するには，用例を複数の母語話者に読み込んでもらい，文脈をふまえ，それらの「ヘッジ性」の有無を判断してもらう必要があるだろう。

引用文献

石川慎一郎（2021）「絵描写作文課題における L2 日本語学習者の動詞使用と習熟度の関係―I-JAS の SW1 課題データの計量的概観―」『統計数理研究所共同研究リポート』*444*, 1-22.

小森万里（2016）「日本語を母語とする大学教員と日本語学習者の意見文におけるメタディスコースの比較」『CAJLE 2016 Annual Conference Proceedings』144-153.

肖錦蓮（2021）「書き言葉・話し言葉 10 ジャンルのコーパス頻度調査に基づく現代日本語における高頻度ヘッジ語形の抽出と使用環境によるグルーピングの試み」『統計数理研究所共同研究リポート』*444*, 103-122.

入戸野みはる（2004）「ヘッジの形とその機能―友人間の会話に見る―」南雅彦・浅野真紀子（編）『言語学と日本語教育Ⅲ』（pp.287-304）くろしお出版.

東泉裕子・高橋圭子（2020）「現代日本語における『もちろん』のヘッジ用法－現代語コーパスの用例より－」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』*12*, 26-34.

堀田智子・堀江薫（2012）「日本語学習者の『断り』行動におけるヘッジの考察―中間言語語用論分析を通じて―」『語用論研究』*14*, 1-19.

前坊香菜子（2012）「コーパスにおける『たぶん』『おそらく』の使用傾向の分析」『一橋日本語教育研究』*1*, 49-60.

山川史（2011）「学習者のヘッジ使用 OPI におけるレベル別会話分析」『日本語教育研究』*57*(10), 124-142.